

# 化粧文化論

—— 黒・白・赤のコントラスト ——

館 林 梓

はじめに

女性を中心に、日常生活を送る中で繰り返される「化粧」という行為がある。化粧はなぜ日々繰り返し返されるのか。また、その意義とはなにか。

化粧とは本来（素）の姿を装い「上書き」する行為であると考えられる。顔に化粧道具を用いる、いわゆる「メイクアップ」という化粧、髪を結うのも化粧、またそれらを洗い落とすのも一種の化粧行為である。

本論文では、化粧の本質の一つ「色」について考察していきたい。化粧においての色は、単色だけで際立つことがなかなか困難である。黒は白があるから映えるのであり、また白も黒があるから映える。またこれらに鮮やかな赤（紅）を交えることにより、各々のもつ「色の良さ・特徴」が増すのである。

化粧史にとって原点であり、外すことのできない黒（お歯黒・眉）、白（白粉）、赤（頬紅・口紅）の相互関係をそれぞれ通史的に考察し、深めてみたい。

一 お歯黒

まずはお歯黒の歴史から整理してみたい。お歯黒の歴史は国内外にさまざまな記述が残されている。国外では、中国の史書『魏志倭人伝』において「黒齒国」として最古の記録を見ることができる。

女王國の東、海を渡る千餘里、復た國有り、皆倭種なり。——  
女王を去る四千餘里。

又裸國・**黒齒國**有り、復た其の東南に有り。 （魏志倭人伝）

女王国とは、かの有名な卑弥呼が治める国、つまり邪馬台国を示す。海を渡ること千餘里東へ向かうと倭種（日本人）の国がある。さらに四千餘里東南にこの「黒齒国」はあるという。この当時の中国での一里は約一八〇〇尺。一尺を三十cmとすると、おおよそ五四〇mであり、これを千倍、四千倍の計算を行うと、「黒齒国」は確かに日本国内に存在したことが証明できる。なお現在の日本では一里が四km、中国では五百mと単位が定められているため大幅な誤差が生じかねないので、古代中国の単位で計算しなければならぬのである。

黒齒国 東海中に在り其俗婦人齒を悉く黒く染む

(後漢書東夷列伝)

同じく中国の史書にも、お齒黒の効果・目的についての記述が見られる。当時、災い予防や魔除け等、呪術的な目的で齒を黒く染めていたらしい。

また、日本国内の記述としては、古くは『古事記』に登場する。しかし、ここではお齒黒としてではなく、椎菱(椎や菱の実は茶褐色でタンニンを多く含み、後述の五倍子粉の代用のもの。)として作品に用いられた。

木幡の道に 遇はしし嬢子 後姿は 小楯ろかも 齒並みは

椎菱如す

(中巻・応神天皇記)

やがて平安時代に入り、文学作品や絵巻等に本格的に登場するようになる。主に「元服」現在の成人にあたる証に、貴族の男性たちは薄化粧をほどこし、「見えない美」として齒を黒く染める風習が確立した。この様子は『平家物語』においても、確認することができる。

「是はみかたぞ」とて、ふりあふぎたまへるうちかぶとより見入りたれば、かねぐる也。あッばれ、みかたには、かねつけたる人はないものを。平家の君達でおはするにこそと思ひ、

(平家物語 卷九 忠度最期)

薩摩守忠度(忠教)は一ノ谷の西方(須磨付近)におかれた平家陣営の大將軍であった。或る日、岡辺の六野太忠純を大將軍とする軍に遭遇する。「味方である」と主張する忠度ではあったが、味方にかねぐる(「お齒黒」)をした者はいないと忠純は気づき、戦いが始まる。当初、圧勝的であった忠度の軍であったが、隙をつかれ頸討ちにあつてしまう。忠純は名前も聞かずに討つてしまったと後悔するが、亡くなった忠度が所持していた文(彼の詠んだ歌が記されていた)より、初めて彼の名を知ることとなった。

とッておさへて頸をか、んと甲をおしあふけて見ければ、年十六七ばかりなるが、うす化粧して、かねぐる也。

(平家物語 卷九 敦盛最期)

熊谷次郎直実が海岸で武者を一騎発見する。その武者は彼の息子の小次郎と同じ年頃の青年であったため、子を持つ親としての親心が重なり、命を助けてやろうと声を掛けたが、敦盛は貴族の者らしく、命請いすることなく堂々と自ら頸討ちを要求し、勇ましい最期を遂げた。

これらから考察できるかねぐるの特徴としては、相手方に口元が見えてしまったが故に、頸討ちにあつてしまった…という一見不運な話である。しかし、命を掛けた戦場においても、化粧(白粉を塗り、眉を太く描き、かねぐるを塗る行為)を欠かさず、「平家の誇り」を持ちつづけた彼らの、貴族ならではの気品の高さをうかがうこともできる。領地に生きて帰ることなく頸討ちにあつてしまったと、悲運な最期ではあったが、「戦う男」としては美しい人生の最

期を送ることができたともいえる。

一方でつくりうること、つまり化粧をすることは非常に煩わしい(無意味なことだ)として忌嫌っていた姫君の物語がある。「虫めづる」の如く、彼女にとっては眉を整えるより、お歯黒をつけるより、虫をか弱いがるのが一番であった。このことは当時の貴族風習から「しきたりを守らない」に値し、現代で言う「問題児のお姫様」として描かれている。

「人はすべて、つくりふところあるはわろし」とて、**眉**さらに**抜き給はず**、**齒**ぐるめさらに、うるさし、きたなし、とてつけ給はず、いと白らかに笑みつゝ、この蟲どもを朝夕に愛し給ふ。

(堤中納言物語 虫めづる姫君)

化粧文化に対し「わろし」と考えていた少し風変わりな女性がいる一方で、やはり平安時代の貴族女性とは『源氏物語』で読み取れるような、いかに外見も内面も美しく着飾り、天皇からのご寵愛を受けるかの熾烈な争いを繰り広げている女性が多いイメージをつよく抱く。また、その争いにおらずとも、愛する男性の訪れを楽しみに、普段以上に装って待っているしとやかな女性をも同時にイメージする。

つごもりの夜、追儼はいと疾くはてぬれば、**鉄漿**つけなど、はかなき—— (紫式部日記 寛弘五年十二月)

追儼とは宮中行事のひとつである。大晦日の夜、悪鬼を払い、疫病を除く儀式のことだ。儀式が思った以上に早く終わってしまい、

せつかくのおしゃれ、つまり鉄漿も長く見てもらえないことなく、はかなく落とさなければならぬのかしら…と、女性の寂しい気持ち綴ったものであろう。

聞きにくきもの 聲にくげなる人の、ものいひ、わらひなど、うちとけたるけはひ。

ねぶりて陀羅尼読みたる。 **齒黒め**つけてものいふ聲

(枕草子 三)

齒黒めを塗りながら話す人の声が聞き苦しいと、清少納言は記す。ところで、お歯黒は一体どのようなもので構成されているのだろうか。時代によって多少作り方は異なるようであるが、次のようなものである。

タンニンを多く含む**五倍子粉**(ウルシ科のヌルデの木にできたこぶを粉にしたもの)に**鉄漿水**、またはお歯黒水(酢酸第一鉄の水溶液)を混ぜて(もしくはは五倍子粉、お歯黒水を交互に塗る)化学反応させ、タンニン酸第二鉄をつくりだし、歯のエナメル質に染める。竿後に水ですすぎ、余分な黒みを除去したり、塗り残しがないか確認を行って完成である。

この作用は、歯質蛋白を強化し、歯の保護、歯垢除去をする。つまり虫歯予防に効果的なものである。

簡易にまとめると、彼女らは万年筆のインクを歯に塗っていたようなものである。また、お歯黒水は以下の段階を踏み、生成される。

① 洪茶をさらに沸騰させる。

- ② 錆びた鉄・麴（お粥、米のとぎ汁）・酢・針・古釘をお歯黒壺に入れる。
- ③ 数カ月間、炉端で温め熟成させ完成する。

内容物から察することができるだろうが、強烈な吐気をとまなう程の、想像しがたい臭気があるそうだ。また、艶出しや色づきを良くするために、たばこの吸殻や茶がらを入れたり、砂糖や飴を加えて甘みをつけ、五倍子粉の渋みや水溶性の臭いを緩和したそうだ。いづれにしても、想像するに恐ろしいものである。既婚女性たちは、夫や子どもへの配慮から、彼らが寝ている間にこれらの作業を夜通し行っていたそうだ。

清少納言が「聞きにくきもの」と、皮肉を込めたニュアンスで記していたことから、お歯黒水の臭いや味に苦しむ人々の文化は、より想像しやすく強烈なものであったことがうかがえる。

やがて貴族のたしなみとしてのみ栄えていたお歯黒文化も、中世後期から近世に掛け、一般庶民の女性へと浸透していく。

はのやうじやうの事 あさゆう、はをならすをかんとす。さりながら、殿の見給ふところにてならし給ふべからず。——おはぐろせざるあひだハ、いかにもはの白きをかんとす。能みがき給ふべし。おはぐろの後ハ、むらもなく、くろきこそ男達ハこのまれけめ。所々白きハ浅ましくうるさき物なり。（女鏡秘伝書）

お歯黒は、白さを残さず染めることがたしなみとされていた。食事等で塗布したところが剥がれ、歯の白さが見えてしまうのは、大

変に不衛生で美しくない姿である。

また、白い歯は未婚の娘を意味した。また夫を亡くし一人身になった既婚女性も、歯黒を落とし後家となったなど、幕末編纂の『守貞漫稿』に記載されている。また、歯を初めて黒く染める際は「初鉄漿祝い」を行った。その様子は川柳に多く残されている。

- ① おはぐろを付て娘ハやほりなり  
（柳樽三十四）
- ② かね（漢字）初のがが（へ）みのおくに母の顔  
（柳樽七十九・五）
- ③ かがみ見てそめものをするはつかしき  
（柳樽十二・二十三）
- ④ お歯黒をくんなと顔をもう隠し  
（柳樽二十六）

一つめの川柳では、お歯黒をつけたがために平凡な娘になってしまった、と娘の成長が嬉しくもあり、照れからくる恥ずかしさもありなのか、敢えて蔑む表現をしているように捉える。二つめでは、初めての鉄漿をひとりつけている娘を、心配そうに鏡越しのぞきこむ母親の心情が表現されている。これらには、「娘の成長を祝う親心」が共通しているだろう。また、三つめは、初鉄漿式を迎えた娘自身の心情を詠んだものだろう。親も照れがあれば、娘自身はおさらのことだろう。そんな恥ずかしさが、四つめの川柳にうまく表現されている。当時、お歯黒水は近所七軒から少しづつ分けてもらうという習慣があった。そのため、親の前でさえ恥ずかしい姿を、最低でも七人の女性に見らなければならぬのである。こうして、恥ずかしさと嬉しさの中で、大人の女性へと成長して行ったのである。

しかし、開国以降、さまざまな外国文化の流れにより日本国内では「文明開化」を迎える時がやってきた。明治時代に入り外国人との交流がますます活発化し、欧米文化に憧れる人々が増えた。そんな外国文化の発展のなか、諸外国にない野蛮で「不気味」な風習としてお歯黒は衰退、排除の過渡期を迎える。

明治元年正月、太政官布告により殿上人や公卿に対し禁止令が出され、二年後の明治三年二月に華族に対しても禁止令が出された。そして、明治六年に昭憲皇太后が率先的にお歯黒をやめられたことにより、ついにお歯黒文化は一般庶民の間からも衰退したのだ。

なお、衰退はしたが現代でも国内のある地域では（参考文献『美人進化論』によると山形県の女性が紹介されている）お歯黒を続けている女性らもいるらしい。「親の背中を見て育つ」ではないが、きつと女性らの母親による日本の誇り高き文化としての強い思いを自ずと汲み取っていたから、いまなお続けているのであろう。

## 二 白粉

### 【歴史】

弥生時代、渡来人の移動により仏教などの大陸・半島文化が日本国内に伝来する。化粧（顔）文化については仏像、壁画、法隆寺金堂・五重塔の天井板より、推測できる。それらとともに白粉や紅（主に花佃・ようでん）など、隋や唐風の化粧方法が伝わった。国内最古の記録では、沙門観成が日本初の鉛白粉をつくり、六九二年持統天皇より褒美を与えられたことが、『日本書紀』より知ることができる。

閏五月——戊戌に、沙門観成に、純十五匹・綿三十屯・布五十端賜ふ。其の造れる鉛粉を美めたまへり。

（日本書紀 持統天皇記）

白粉の別名は、鉛粉、脂粉、胡粉、しろきものとも呼ばれていた。平安時代になり、貴族たちの住居の形態が変わる。寝殿造りとなり、家全体が広く大きくなりにはなったが、日中では屋内に日光が入り難いため、顔が暗く見えづらいという問題が起きた。そこで顔を晴れやかにみせるために、白粉や紅を使った化粧をするようになった。古語の「面白し」は「晴れ晴れとした」との意味をもつのは、この白粉の発展からだとの一説がある。また、白粉を塗り顔が白く美しくなることにより、黒髪の輝かしい美しさがなおのこと映える効果もある。

肌が白い美しい人の基準であることは、現在でも老若男女問わず大多数の意見がそうである。つまり、白粉文化は多少の変化を伴いつつも根強く残っているのだ。

平安時代、身分の高い女性の描かれ方は「引目鉤鼻」といって、長くて美しい漆黒の髪、くもりのない透き通るような白い肌、蚕のような太くて可愛らしいまる眉、優しい印象を抱く細くて切れ長の目、ぼつと顔面上に花が咲いたような小さなおちよほ口、ふつくらとした下ぶくれの輪郭を特徴としているものだ。これらは、十二世紀以降の絵巻や冊子に多く登場し、彼女たちの表情からは主張や視線を感じ取れないのも、また特徴である。つまり、読み手（受け取り手）である私たちは、登場人物たち（描かれている世界の人たち）の感情、喜怒哀楽を自由に想像することが可能なのだ。

やがて、日本固有の白肌への美意識は、時代とともに確固たるものとなり、さまざまな文学作品にも表現されるようになった。

御色は、いと白く、光るやうにて、とかくうち粉らはすことありし  
(源氏物語 御法)

式部のおもとはおとうとなり。いとふくらけさ過ぎて肥えたる人の、色いと白くにほひて、顔ぞいとこまかによしばめる  
(紫式部日記)

頭には花を塗り、顔には紅・白い物をつけたらんやうなり。

あはれにうつくしう尊き様――

(栄花物語 卷一六 もとのしづく)

しかし、私は決して「肌が白い」ことがすべてではないと考えている。肌が黒いからといって不美人でもない。しかしながら、化粧文化を論じていく上で、「白肌」は切り離すことのできない存在なのである。

ここでの論旨とは離れるが、一九九〇年代後半「ガン黒ブーム」なるものが、若い女性の間で一世を風靡した。今現在、その女性たちの年齢を超えたことでおさら感じるが、あれだけ大勢の女の子たちが同じ格好をし、同じ化粧をして、同じような話し方(しゃべり方)をしながら街を闊歩していた現象を「一文化」として注目すると、とても興味深く、いや感動さえする。私自身があの化粧方法を試してみたいとは思わないが、長い長い化粧文化の中での大幅な

シフトチェンジを、十〜二十代の若い彼女らが自身の交友関係で広めていったのである。恥だとされる一方で、改革心のある彼女らを見習うべきでもあるのかもしれない。そしてさらに面白いのが、ほんの数年前なのにその文化は、現在ではほぼ壊滅していることだ。

### 三眉

唐から「蛾眉」が伝わってきたのが眉の歴史の始まりである。当時唐では十眉図と呼ばれた、鴛鴦・小山・五岳・三峰・垂珠・月稜・分梢・涵烟・払雲・倒暈眉の伝説の施術方法があった。これらは名前だけで、それぞれの形や意味などの詳細は残されていない。また、蛾眉とは眉の端を太く描く方法で、昆虫の蛾の様な形をしていることからこう呼ばれていた。このことは、正倉院『鳥毛立女屏風』などに見られる。

しかし蛾眉は日本人の顔には合わなかった。当然ながら、日本独自の眉の描き方が必要となってくる。そこで生まれた流行が『万葉集』に登場する「三日月眉」である。三日月眉とは、眉の上部の毛を抜き、際を揃えて眉墨でしっかり描き、下部の毛は抜かずにはかすという方法だ。

月立ちてただ三日月の眉根搔き

日長く恋ひし君に逢へるかも

(巻六 九九三)

振さけて若月見れば一目見し

人の眉引き思ほゆるかも

(巻六 九九四)

眉を美しく整える美意識が発達し、三日月（若月）にたとえられて詠まれた。また真直ぐ横に描く様子から山の例え（山の枕詞）としても登場した。

妹をこそ相見に来しか眉引きの

横山 辺ろの猪鹿なす思へる （巻一四 三五三二）

眉のごと雲居に見ゆる阿波の山

かけて漕ぐ舟泊まり知らずも （巻六 九九八）

巻六の九九三番歌は、新しい月を見ながらこの三日月眉を搔けば、久しく恋をしているあなたに逢えるだろうかと詠んだ歌である。寂しくたたずむ女性の姿が目に見え、振り返って若月を見ると、思い人の三日月眉を思い出す。眉引きと引かれる思いを掛けている歌である。巻一四の三五三番歌は、思う娘に会いにやってきた男ではあるが、山からの獣に間違われているのではないかと不安な心情を詠む。眉引きの横にまつすぐ伸びゆく様子から、山の姿と男の娘に対するまつすぐな思いを掛けているのだろう。巻六の九九八番歌は、船王による船旅の歌である。まつすぐ描かれた眉のように横広く立つ阿波の山々を雲のかなたに見るが、船を泊める港の名前も知らない、やはり不安な気持ちを表している。月に例えることは思い人への哀愁の念を、山に用いるのはまつすぐ伸びる情景が不安を表しているように読み取れる。また九九三番歌以外にも「眉根搔き」の歌がい

くつかある。

暇なく人の眉根をいたづらに

搔かしめつつも逢わぬ妹かも （巻四 五六二）

めづらしき君を見むとこそ左手の

弓取る方の眉根搔きつれ （巻一一 二五七五）

今日なれば鼻の鼻ひし眉かゆみ

思ひしことは君にしありけり （巻一一 二八〇九）

眉根搔き下いふかしみ思へるに

古人を相見つるかも （巻一一 二六一四）

このように、眉を搔く行為（かゆい）には、恋しい人に会える前兆として詠まれている。巻四の五六二番歌では、しきりに眉を搔くことで逢えるのではないかと、逢えることのない恋人への虚しさを。巻一一の二五七五番歌もまた、滅多に逢えない人の姿を思い、弓をもつ左手（目標物に近い方の手）で眉を搔き、同じく逢えない切なさ。同じく巻一一の二八〇九番歌は、眉のかゆみ、鼻のかゆみ（むずむずした感じ）が起きたのは、あなたに逢える前兆だったのだろうかと、願望・希望を表現している。同巻の二六一四番歌では、眉を搔きながらおかしな感じと感じたら、昔馴染の人に逢ったとの歌。巻六、巻一一には多くの「眉」に関する歌が存在することがわかる。また、源俊頼の歌論書『俊頼髓脳』にも同じように記されている。

「恋しき人を見むとする折には眉のかゆきなり。それにとりて左の眉はいますこと疾く叶ふなり。」

物のあはれ知らせ顔なるものはな垂り、まもなうかみつつ物いふ聲。眉抜く。  
(枕草子 八十五)

平安時代、成人を迎えた貴族女性は本来の眉を抜き、その位置よりも上部に新たな眉を描き改めた。いわゆる「まろ眉」である。雅楽歌謡「催馬楽」に「眉刀自女」との歌がある。この刀自とは婦人を表し、眉毛の手入れをせずそのままにしている女性との意味がある。つまり、眉の手入れひとつにして、貴族であるか、庶民であるかの身分階級を表す材料として描かれていたのである。

やがて中世後期、近世にかけて、婚期を迎えた一般女性は歯を黒く染め、眉を剃り落とした。なお、歯を染めるだけは、半元服。懐妊、分娩後に眉まで剃り落とすのを、本元服と言った。

やがて眉引きにも、第一節のお齒黒のように、明治六年の公家男女に対する引き眉禁止法で衰退が訪れる。しかし、現代になり、年齢・身分・行事に関係なく復活をしている。一時は剃ることを禁止されたしまった文化ではあるが、自由にその日のテーマや気分に合わせて眉毛を描くのも現代女性における「化粧の楽しみ」のひとつとされているのではないだろうか。

## 四 紅

紅の歴史は、推古天皇一八年三月、高麗国の曇徴が紅花の種を伝えたとの記述が最古のものである。太陽信仰の強い南方系の習俗により、太陽崇拜・悪魔払いを表現していた上代に始まり、鮮やかな赤を取り入れることにより艶やかな女性らしさを表現するようになった近世までが、紅文化の長い発展期である。

紅といっても、用途に応じて種類が異なってくる。ここでは、頬紅と口紅に分類して論じていきたい。先ずは頬紅から。頬紅の原点は「朱丹」と呼ばれていた、中国から伝来された「粉」であったことが、同じ文書ではあるが『魏志倭人伝』『後漢書倭伝』に記されている。

朱丹を以つて其の身體に塗る、中国の粉を用うるが如きなり。

(魏志倭人伝)

並びに丹朱もて身を扮すること、中国の粉を用うるが如きなり。  
(後漢書倭伝)

『日本書紀』によると、上代では顔に赤土を塗る風習があったそうである。これは「赭」と呼ばれる「赤土」であったことが読み取れる。兄の彦火酢芹命が掌と面に赤土を塗り、弟の彦火々出見命に俳優者になると告白する。このように、現在の芸能「俳優者」に通じるものであることも同時に読み取れる。



是に、兄、著たふさ鼻さきして、緒を以て掌に塗り、面に塗りて、其の弟に告して曰さく、「吾、身を汚すこと此の如し。永に汝の俳優者たらむ。」とまうす。  
(神代下)

やがて赤土が頬紅へと変化し、白粉と共に歴史を刻んでいくのである。※第二節【資料 白肌】参照

それは、白の中にパツとした差し色として、また、赤のみではきつい印象を緩和するための相互作用の関係であろうと考える。それは現代での実例で例えると、顔色（血色）が悪いとき、頬紅を軽くのせるだけで、明るく元気な印象を与えることができる効果である。しかし、頬紅よりも手軽で便利な紅化粧が口紅である。その繁栄は江戸時代が一番であった。その当時「金一匁、紅一匁」と言われたほど、紅花はとても貴重なものであり、栽培が普及し入手しやすくなった当時の流通背景とも大きく関連しているだろう。

国内での最古の歴史は、推古天皇十八年三月に高麗國の曇徴が紅花の種を伝えたことされる。その様子は、平安中期の記述で初めて登場する。十一世紀前半の藤原明衡による漢詩文集『本朝文粹』に記されているが、口紅としては流行しなかつたそうだ。

矧むや夫れ女は其の貞潔を貴び、嫁ぎて其の婚姻を成す。千年の契態を結び、一夜の交親を快くす。暁の露濕ふ時に、楚々の服をを潤らし、夜の月幽かなる處に、輝々の身を顕す。魏柳を黛に占め、燕脂を脣に點す。  
(本朝文粹)

やがて、江戸時代に入るとさまざまな作品に多く登場するように

なる。中でも『女重宝記』『女用訓蒙図彙』は江戸女性のたしなみ本（現在でのファッション誌のような存在であろう）とされ、多くの女性が参考にしていたのだろう。流行の髪型から、服装、化粧方法など、現代人の私が見ても、なかなか楽しめる本である。

よく拭はざる顔に厚くおしろいしたる、口紅のてりかがやける  
——紅いたくさしにたるハ、むくつけくさへこそ見え侍れ  
(女郎花物語)

白粉にかぎらず、紅なども頬さき、口ひる、爪さきにぬること  
うすくとあるべし。

(女重宝記 卷一 女けしやう)

ほうさきに紅をつくるは桜の花ぶさにたとへたり。花のしろき底に、ほのくと赤色のあるにもあらず、なきにもあらぬやうにすべきなり。然るを紅つけたると、めにたつは、無下に心おとりせらる、也。——唇は丹花の唇とて花にたとへたり。是もいとく赤きは賤し、ほのほのとあるべし  
(女用訓蒙図彙)

しかし、ただ単に「明るい紅」を塗り、楽しんでいたわけではない。この当時、濃い赤は遊女の間のみで流行っており、濃すぎる赤は上品ではないとされた。このことは『女郎花物語』に見られる。

現在でも、女性が「素敵」「かわいい」と考える色や化粧方法でも、男性にとっては「けばい」だの「かわいさがわからない」

だの「興味がない」だのと、男女で好みが分かれる場合が多々ある。この問題については、大変に興味深いので、追々考えてみたいと思う。

よく拭はざる顔に厚くおしろいしたる、口紅のてりかがやける

——紅いたくさしにたるハ、むくつけくさへこそ見え侍れ

(女郎花物語)

そのほかにも、井原西鶴の代表作『好色一代男』『好色一代女』にも「口紅をひらかせ」や「口紅粉むさきほど塗て」、「口紅用捨なくぬりくり」と、俳諧的思想や皮肉を込めた批評を多々、見受けることが出来る。白粉を厚く塗ったり、口紅を輝かせることは見苦しいと、非難していることが、当時の男性の「生の声」であったのだろうと想像すると、大変におもしろい。

## おわりに

元來化粧とは、日常生活(ケ)から神に近付くための(ハレ)への切り替えとしての意味をもっていた。上代で言えば、マツリの際に化粧を施すこと。中古においては、一般庶民と貴族の身分階級や文化に隔たりをつけるため。中世では、武士たちの出陣の際に薄化粧をしたり、既婚・未婚女性の明確なしるしとして、男女間で化粧の意味合いが分岐点を迎える。近世では、遊女を中心に華やかな化粧文化の発展、「女性のたしなみ」としての身分階級に隔たりなく、化粧が定着・確立を迎える。開国宣言後の近代では、諸外国との活

発な交流により、日本古来の化粧方法は徐々に衰退し、欧米を中心に外国文化の化粧が流行・浸透していく。そして現代でもなお、変化を繰り返した化粧文化の発展は衰えを見せない。

## 【参考文献】

- 新 日本古典文学大系『古事記』岩波書店
- 新 日本古典文学大系『日本書紀』岩波書店
- 新 日本古典文学大系『万葉集 一〜四』岩波書店
- 新 日本古典文学大系『堤中納言物語 とりかへばや物語』岩波書店
- 新 日本古典文学大系『枕草子』
- 新 日本古典文学大系『平家物語 下』岩波書店
- 村澤博人『美人進化論』東京書籍 一九八七年
- 村澤博人『顔の文化誌』東書選書 一九九二年
- 石上七輔『化粧の民俗』おうふう 一九九九年
- 陶智子『江戸美人の化粧術』講談社 二〇〇五年
- 村澤博人・津田紀代・村田孝子
- 『増補改定 化粧史文献資料年表』ポラ文化研究所 二〇〇一年改訂